九　レーニンと社会の更新

内部からの、細胞組織の更新による社会更新の原理は、その理念自体から生ずる確固たる地位をなんらマルクスの教説においては見出さなかったのであるが、このことは、この教説を実現しようとする今日の大きな企て、意識的な人間意志の、驚嘆に値いするけれども深刻な問題を含むこの努力においても同様である。このような否定的事実は、いずれの場合にも、革命前の時期については、われわれがすでに見たように、資本主義の支配下では、たんに断片的にもせよ、いかなる社会再生も成就されえないという理由によって正当づけられている。しかし革命後の時期については双方の場合、社会再生に対応する社会形態を企画しようとすることは、ユートピア的であると説明されている。「ユートピアは」とエンゲルスは一八七二年に書いた、「人びとが『現存の諸関係から』、現存社会のあれこれの矛盾が解決されるような形態を前もって規定しようと企てるときに生れる。」「マルクスにおいては」とレーニンはいっている、「彼が『新しい』社会を発見し、それを幻想でつくりあげるという意味のユートピア主義のいかなる痕跡も見出されない。」しかしそのような幻想像は実際的には益するところがないにしても、

人びとが行動をもって追求する方向がその人の抱く理念によって指し示される事実はきわめて重要である。社会主義の理念は、マルクスにおいてもまたレーニンにおいても、共同の生活と共同の労働とによって内面的に結ばれた小さな諸社会とそれら小社会の連合とから成る新社会の有機的建設を目ざしている。しかるにマルクスにおいてもレーニンにおいても、それが明確かつ統一的な行動方針とはなっていない。両者ともに、再建の分散主義的要素が革命政略の中央集権主義的要素におしのけられている。

革命の達成には当然きびしく集中化された行動が必要であるというのが、彼らの行動規準であり、それにはすでに述べたように少なからぬ真理が含まれている。そこに欠けているのは、その集中化された行動からの要求とそれを害せずに可能な分散化された社会を形成する仕事との間に、思想の実践が要求するものと思想自体が要求するものとの間に、革命政略の要求と生成する社会主義的生活の権利との間に、時々に限界線を引くことである。決定はつねに、マルクスにおいては運動のための理論と指令の方に、レーニンにおいては革命の実践と国家および経済の再編成の方に、本質的には政治のため、すなわち中央集権主義のためにくだされている。こうしたことの原因は、たしかにかなり多くは状勢自体に、社会主義運動が直面しなければならなかったいくたの困難、ソヴェト制度が克服しなければならなかった特殊の諸困難に帰せられるであろう。しかしそこには何よりも、われわれがマルクスおよびエンゲルスに見出し、そし

てレーニンおよびスターリンに伝わるところのある思想および傾向が表明されていた。すなわちそこから唯一の確実なテーゼと唯一の標準的な指令とが発せられる教説および行動の絶対的な一中枢、別の言葉でいえば「プロレタリアートの独裁」によっておおわれたこの中枢の独裁という思想と、生成しつつある社会主義的自治共同体の分権化の必要を犠牲にして中央集権主義的革命政治を永久化しようとする傾向とである。レーニンは、まさに革命がまだその終局にいたっていない事実を明らかにさし示す事態によって、容易にこの傾向にしたがうことができた。一方の社会的原理による政治的原理の廃棄にたいするマルクスの要求と、他方の政治的原理の実際上の継続的支配との間に生ずる矛盾は、革命がまだ完成されていないと見ることが正しいと感じられていることによっておおいかくされている。その場合マルクスにとって社会主義は、「それを組織化する活動が開始するところ」では、早くもその政治的外皮を脱ぎすてるものであることなどもちろん考慮されていない。ここに、またもほかならぬ唯物史観そのものによっておおいかくされた問題がひそんでいる。唯物史観によれば政治はたんに階級闘争の利用および表現であり、階級国家の廃止とともに政治的原理はその根底を引きぬかれるのである。ひとりみずからのみが妥当な教説および行動であるとして、他のあらゆる社会主義観にたいして行う死活の闘争は、たしかに非政治的と称することはできない。しかしこのような闘争は、たとえば他のすべての社会主義に誤れるもの、ブルジョア・イデオロギーの残り物という烙印をおす

にちがいない。他の見解の社会主義が活動している間は、まさしく革命は終局にいたっていないのであるし、またよし組織化の活動がすでにはじまっているにしても、政治的原理はまだ社会的原理によって解消されることはできない。「非本来的な意味の」政治権力はその中央集権的要求において、「本来的な意味」の政治権力がそうであったよりも、いっそう包括的に、無慈悲に、「全体主義的」になることが可能である。といってもこれは先にも述べたように、レーニンがたんに中央集権主義者であったと主張するのではない。彼はある点ではマルクスほどに中央集権主義者でなく、マルクスよりもエンゲルスに近かったのである。しかし彼の思想と意志を支配したのは、マルクスおよびエンゲルスにおけると同じように革命政治の動機であって、それは、分散化された共同体生活を求める生きた社会的動機をおしつぶし、かくしてこの社会的動機はただ挿話的にしか働らきえなかったのである。こうしたことのすべてから、新しい国家秩序のうちには、国家的中央集権主義と権力集積に制限を加えようとするいかなる力もさしはさまれない結果となった。そのように働らく力なしに、そうした制限がいかにして次第に加えられることになるかは不可解である。あるとき（一九一八年）レーニンはこう説明した、「どのような社会主義が存在することになるのか、われわれは知らない。いつどの国家が死滅しはじめたか。」実際歴史の上で、いかに小さな規模のものにもせよ、その例証としてあげることのできるいかなる実例も存在しない。これを世界史上はじめて実現するためには、人びとは力強

い、理念に燃えた精力を分権化へ傾注しなければならなかったであろう。こうしたことは何もなされなかったのである。このような事情の下で、集中化された権力の自己放棄や中央集権主義の自己制限が実現されるであろうというようなことは、（社会主義者の側からも）奇蹟の信仰に類するといわれたのは不当ではない。

社会革命後における国家の「死滅」説は、マルクスのとくに用心深い暗示からエンゲルスがつくりあげたものである。そこで、この問題に関するマルクスの主な言明を年代順にまとめることは無益ではあるまい。一八七四年にマルクスは、国家は「将来の社会革命の結果消滅する」であろうが、それは公的機能が政治的なものから単純な管理的なものに変るからであると説明した。一八七七年には、これをもっと精確にして、プロレタリアートは生産手段を国家の所有に移すとともに、国家を廃止するであろうし、さらに国家による生産手段の取得はまさしく「同時に国家としての国家の最後の自主的行為」であり、その後では国家は「おのずから」「眠りにはいり」もしくは「死滅する」であろうといった。一八八二年には、この「同時に」という黙示録的言明につづけて、「必然の国から自由の国への人類の飛躍」が行われるであろうといった。ここに最終的なことが語られている。ところがいまやこれにいちじるしい逆戻りがつづくことになる。マルクスの死後、もはやわれわれはこの「同時に」をエンゲルスの口から聞くことはできない。一八八四年にエンゲルスが、全国家機構が考古博物館に移されるであろう

と語るとき（『家族・私有財産および国家の起源』）、この意味深長な移行の時点は、もはや生産手段が国有化されるときではなく、明らかにそれよりもずっと後であり、また明らかに長期の過程に関する事柄である。それというのは、この博物館への引渡しを行う権力はいまや、「生産者の自由かつ平等な組合を基礎にして生産を新たに組織する社会」だからであり、――しかもこの事業が一回の国有化行為によってたんにおのずから開始されるというのである。これは「発展の進行」に関する『共産党宣言』の公式に合致し、エンゲルスはここでそれを想起している。ただそこではすでに「結合された諸個人の手への」生産の集中が、公的権力からその政治的性格が失われる結果となる発展の成果と見られている。一八九一年にはエンゲルスはさらに、しかもそれ以上の後退は必要でもまた可能でもないほどに後退して、次のようにいっている。階級支配にたいする闘争において勝利をおさめたプロレタリアートは、「新しい自由な社会状態において成長した世代が国家というがらくたをすべて棄て去ることができるようになるまでには」、国家の「最悪な面」を「できるだけ速かに切りとら」ざるをえないであろう。　エンゲルスはこれをマルクスの『フランスの内乱』新版の序文でいっているが、マルクスは二十年前すでにこの著書で、労働者階級は「長期間の闘争を、人間も状況も一変するであろうような歴史的過程の全系列を経験しなければならない」と書いている。この見解をエンゲルスは彼の序文で革命後の時期におきかえている。しかしそれによってかの「同時に」という言葉はいちじるしく弱められることになる。

もはやプロレタリアートが生産手段の国有化とともに国家としての国家を廃止するというのではなく、むしろプロレタリアートはじめに、まだ「新しい世代」が成長するまでは、ただ国家の最悪な面を切り棄てるにとどまることになる。しかるにマルクスは同じ著書でパリ・コミューン制度について、コミューンが勝利を収めたならば、「国家」という無用の寄生物が食いつくしてきたところのすべての力を、社会の身体に返すであろうと述べた。これでマルクスはコミューンの形成によってもちきたされる変化、したがって「同時に」という点に重きをおいたのである。ところがエンゲルスは上記の序文でいまやこれからはるかに後退した。この後退の責を負うべきいくつかの歴史的経験もたしかにありはした。しかしエンゲルスがそれらの歴史的経験にかくも深く影響されたのは、彼にもまたマルクスにも、社会の構造的更新や国家廃止の準備を目ざす統一的に一貫した理念的方針や分権化の活動への強い確固たる意志がなかった事実によるのである。レーニンが相続したのは、分裂した精神的遺産、すなわち社会主義的生命力を欠く社会主義的革命政略であった。

レーニンは、よく知られているように、「廃止」はブルジョア国家についてのことであり、「死滅」は「社会主義革命後のプロレタリア国家制度の残存物」についてであること、エンゲルスの定義によれば「特殊の抑圧権力」たる国家は、まずブルジョアジー抑圧のためのものであり、したがってプロレタリアートの独裁として、プロレタリアート権力の集中的組織として不

可欠であることを強く指摘して、エンゲルスの問題点を克服しようとつとめた。それによってレーニンがマルクスの（またエンゲルスの）意向をよくいいあてていることには異論の余地がない。彼は正当に、マルクスが（一八五二年）このプロレタリアート独裁を無階級社会への過渡として示した文章を引用している。しかしパリ・コミューンに熱中した一八七一年のマルクスには、革命行動に必要な中央集権主義のさ中にも地方分権化が行われるのは確かなことであった。またエンゲルスも生産手段の国有を「国家としての」国家の廃止とよんだとき、それによってある決定的な過程を念頭においていたし、その過程の直接の成果が革命行動完了ののちただちに出現するものと考えたのである。

レーニンは、「マルクスが一八五二年にまだ廃止せらるべき国家機構にとって代るべきものは何かという問題を具体的に立てなかった」ことでマルクスを賞讃している。さらに、レーニンの論ずるところによれば、パリ・コミューンが最初にその何かをマルクスに教えたという。だがパリ・コミューンはこの問題をまったく具体的に提出した人びとの思想の実現であった。レーニンはまた「マルクスが歴史的経験の事実的基盤に緊密に立っていた」ことでマルクスを賞讃する。だがコミューンの歴史的経験は、まさに、熱情的な革命家たちの心情に、分権化され、広範囲に非国家化された社会の像が生きており、それを彼らが現実に転化しようと企てたことによって可能となったのである。まさしくパリ・コミューンの精神的父祖たちは、マルク

スやエンゲルスがもたなかったところの、かの分権化を目ざす理念的方針を抱いていた。そして一八七一年の革命の指導者たちは、不十分な権力手段をもってではあったけれども、革命のさ中にその理念の実現を開始しようと企てたのである。

行動の本来的問題をレーニンは弁証法の定式で簡単に片づけている。「国家が存在する間はいかなる自由も存在しない。自由が存在するときには、もはやいかなる国家も存在しないであろう。」ここでは弁証法が本質的な課題、すなわち今日実現することが可能であり、また実現してしかるべき自由の最大限がいかなるものであるか、今日なおどれほど「国家」が必要であるかを日々吟味し、そしてたえず実際的結論を引きだすという課題をおおいかくしている。人間がいまのままである間は、おそらく全くの自由など決して存在しないであろうし、まさにその間は「国家」すなわち強制が存在するであろう。しかし問題は日常のことである。すなわち国家が必要避くべからざる限度以上でなく、自由が許される限度以下ではないことが問題なのである。そして自由とは社会的に見れば、何よりも共同社会への自由、国家の強制から独立した共同社会への自由を意味するのである。

「(国家の)死滅がはじまる時点の決定について語りえないことは明白である」とレーニンはいっている。だがそれは決して明白ではない。エンゲルスが、生産手段を取得するとともに国家は社会全体の代表者となり、それとともにみずからを不必要なものにすると説いたとき、それか

ら出る結論は、まさしくそれは国家の死滅がはじまらなければならない時点だということである。それがはじまらないときには、国家死滅の傾向が革命行動における決定的な要因として実際に確立されていないことが証明されている。しかしそうした場合には革命とその成行から、国家の死滅もしくはたんにその縮少さえも期待することはできない。権力は、対抗権力が強要しない限り、退きはしない。

「今日の政治のさし迫った現実の問題」としてレーニンが一九一七年九月に述べているのは「すべての市民を一つの大きな『労働組合』すなわち国家全体の労働者および職員に変えることである。」「社会全体が」と彼はつづける、「同等の労働と同等の賃銀とをもつ一つの事務所、一つの工場となる。」だがここでわれわれは、入口に Lasciate ogni autonomia, voi ch'entrate（一切の自律を棄ててここに入れ）と書かれた大工場の自動機械装置の圧制的性格についての、さきにあげたエンゲルスの言葉を想い起してはならないであろうか。なるほどレーニンはこの工場の規律をただ「社会の根本的浄化に必要な一段階」と見ている。そしてこの段階は、「すべての人びとが社会的生産を自主的に管理することを学びとる」やいなや、踏みこえられるものと彼は考えている。それからのちにはおよそいかなる支配の必要もなくなりはじめるからである。生産管理の能力が不平等に与えられており、平等な訓練もこの生来的欠陥をおそらく補いえないことが、レーニンにおいては全然考慮されていない。だが人間的現実に相応する

課題としてはむしろすべての管理機能を時々に可能な限り広範囲に非政治化すること、すなわちこれら機能が権力の集積に変質する可能性をとりさることであろう。もはや管理者だけが存在し、いかなる被管理者も存在しないことが問題なのではない。――これこそどんなユートピアにもましてユートピア的である。――問題はむしろ管理がどこまでも管理としてとどまり、それが支配にならないこと、もっと正確にいえば、管理が時々の事情によって無条件に必要とされる（その決定はもちろん支配者自身の仕事ではありえない）以上の支配的要素を取りいれないことである。

たしかにレーニンは、ある根本的な変革が「すぐに」行われることを欲した。政権奪取の後すぐに労働者は、「古い官僚制装置を粉砕し、それを土台からつき崩して一つの石も他の上に重なっていないようにし」、そしてこの官僚制機構を新しい、まさしくこれら労働者から構成される装置にとりかえるべきであった。このさいレーニンは「すぐに」という言葉をなんともくりかえしている。パリ・コミューンがなしたように、新しい装置が新しい官僚制に変質するのを防ぐために必要な方策が「すぐに」施さるべきであり、そのまっ先に官吏の選任と解任、マルクスの言葉でいえば官吏の「厳重な責任」が確立されなければならない。この根本的な変化は、他の変化とはちがって、発展にまかせらるべきではなく、革命行動自体のうちに、しかもその決定的に重要な行為としてふくまれるのである。すぐに「新しい、測り知られぬほど高

い、くらべるもののないほど民主的なタイプの国家装置」が形成せらるべきである。

かくてレーニンはこの点で社会構造を直接変改することを必要と考えた。このような変改なしには、いくら重大な干渉を加え、いくら新しい制度、新しい法律、新しい権力関係をうちたてても、依然公的生活の中心ではすべてが旧態のままであることを彼は理解していた。それ故レーニンは、分権主義的な一切の傾向に賛成ではなかったけれども、パリ・コミューンにとって分権的社会像の有機的構成要素であったところの、また実現を迫るそのような社会像と結びついてのみ達成されるところのこの即時的変改の要求をかくも力強く主張したのである。それは、ソヴェト・ロシアでは孤立した要求であるために、実現されてはいない。その晩年にはレーニン自身の口から次の痛烈な言葉が語られている。「われわれは官僚制的ユートピアとなってしまった。」

もっとも、レーニン自身の発意からではなかったけれども、構造変改への口火も切られはした。またレーニンは、それに潜む十分な構造の質は知らなかったにしても、その重要さは認めていた。パリ・コミューンの企図に似た、しかも大きな可能性を含むところの発端、それはソヴェトであった。これまでのソヴェト体制の歴史は、ほかの点ではどのようであるにしてもこの可能性の否定の歴史もである。

最初のソヴェトは、一九〇五年の革命に、当時レーニンがいったように、まず「一定の目標

を達するための戦闘組織」として、すなわち初めはストライキの機関として、ついで革命行動一般を指導するための代議体として発生した。それは、パリ・コミューン制度のように自発的に、原理からではなく事態の無準備な結実として発生した。当時レーニンはアナキストたちにたいして、労働者評議会（ソヴェト）は、けっして労働者議会ではなく、けっして自治の機関でもないことを強調した。それから十年のちに彼は、ソヴェトおよび類似の制度は、「蜂起と相結んでのみ」永続的に役立つことができる「蜂起の機関と」見なされなければならなかったと説明した。一九一七年三月になってはじめて、ソヴェト形態がロシアに、トロツキーの言葉によれば「ほとんど自動的に復活した」のち、そして革命勝利の知らせがスイスにいるレーニンのもとに達したのち、レーニンははじめてペトログラード・ソヴェトに「労働者政府の胚種細胞」を、また評議会一般のうちにパリ・コミューンの経験の成果を認めた。そこで彼がなおまっ先に考えたのは、明らかに「革命の組織」すなわち「第二の真の革命」の組織、もしくは「反革命にたいする組織的暴力」である。それはマルクスがパリ・コミューン制度に、とりわけ革命行動の機関を見たのと同様である。とにかくレーニンは、コミューンと本質を同じくする評議会を、「われわれの必要とする国家」すなわち「プロレタリアートが必要とする」国家、あるいは「われわれがその上に建設しなければならない基礎」として示した。彼が、ロシアに着くとすぐに、ソヴェト自体のなかで支配的であった意見に反対して要求したのは、「下から上への、

全国にわたる労働者・農業労働者および農民の代表者ソヴェト共和国」である。この意味でその当時のソヴェトは、あたかもパリ・コミューンがマルクスにそうであったように、レーニンにとって「社会主義への一歩」である。それはもちろん、マルクスの場合と同様に、まさしく政治的な、革命政治的な一歩、まさしく革命思想がそこに結晶する制度、「革命的独裁、すなわち下からの民衆の直接の発意にもとづき、集中化された国家権力から発する法律に基づくのではない権力」、「直接的『奪取』」である。また諸ソヴェトへの権力分割はいまもレーニンにとってはいかなる真の分権化をも意味しなかったばかりでなく、さらにそうした分権化建設の発端をも意味しなかった。ソヴェトの政治機能は、包容的な、経済と社会を包括する生活関連の計画のうちに据えられていないからである。レーニンはソヴェトを構造の観念としてでなく、行動綱領としてとりあげている。

レーニンが帰国の翌日、全ロシアソヴェト会議のボルシェヴィキ派委員の集会で発表した見解には、いかにも彼らしい特徴がある。「われわれはみなソヴェトにしがみついたが、それをつかまえはしなかった。」かくてソヴェトは彼にとってはすでに、ソヴェトがそれ自体としてまたそれ自身の構成員によって理解されている意味とは独立の、客観的歴史的な意味をもっていた。メンシェヴィキおよび社会革命党にとってソヴェトは、一九〇五年すでにメンシェヴィキにとってそうであったところのもの、またレーニンの帰還当時ロシアで実際に多少ともそう

であったところのもの、すなわち政府を管理するための機関、民主主義の保証であった。それがレーニンおよび彼を支持する一部のボルシェヴィキにとってはるかにそれ以上のもの、すなわち真の政府それ自身、「革命政府の唯一の可能な形態」、それどころか生れつつある新しい国家であった。――しかしまたそれ以上ではなかった。この発生期国家の分権主義的形態がレーニンの心をかきみださなかったのは、このまったくダイナミックな革命の段階にあっては、ソヴェト運動に積極的に参加することが、唯一の革命的意志だったからである。

パリ・コミューンの実例はレーニンにとってきわめて重要であったが、その理由は、マルクスがそれによって――またそれだけによって――新しい国家秩序の本質的特徴を示したことと共に、レーニンの精神が、ロシアの指導的な革命家たち一般の精神と同様に、「古典的」革命の伝統としてのフランス革命の伝統にずっと影響されていたことにあった。フランス革命の影響、それを基にしてたえずくりかえす自己の革命の考量、その対応する諸段階との折にふれての比較等はしばしば、とりわけ中央集権主義への傾向に関して、否定的な影響をおよぼすに十分であった。しかし、レーニンはパリ・コミューンの模範を普遍史的理解のうちに加えなかった。歴史上、民衆が封建的もしくは中央集権的権力装置を打ちこわそうと欲するときには、いつも（アルツール・ローゼンベルクがクロポトキンおよびランダウアーにしたがって主張するように）同様の企図に出たことは、レーニンには知られていなかったか、あるいはそれに関

心をもたなかった。まして――もっともあるときレーニンは、ソヴェトは「その社会的および政治的性格からして」パリ・コミューンの国家と同一であると語っているが――これらすべての企図では社会的分権化が、その程度は様々であるにせよ、政治的分権化に結びついていた事実など理解しなかった。レーニンにとって歴史から引きだされる決定的なことは、人類がこれまでにソヴェトよりも高級の優秀な政府形態を作り出さなかったという確信だけであった。それ故ソヴェトは「全生活自体をその手中に握ら」なければならなかった。

むろんレーニンはソヴェトが本質上分権的組織であることを見誤りはしなかった。「全ロシアが」と彼は一九一七年四月にいっている、「すでに地域的な自治機関の網におおわれている。」とくに革命的な諸方策――警察の廃止、常備軍の廃止、全人民の武装などもまた、まさに地方自治によって実現されることができたであろう。これこそ問題なのである。しかしこの自治機関が、これらの任務を果したのち、地域的および機能的分散化に基づく永続的な組織にまで結合されることができ、また結合されるべきであるという点については、ただの一言もふれられていないし、おそらく考えられもしなかった。自治制度の設立と強化にたいしては革命政治の目標以外にいかなる目標も与えられていない。みずからの力で自治を実現することは、すなわち「革命を押し進める」ことなのである。もっともこれに関連してなるほど、ごく簡単ではあるが、社会的動機すなわち村落コミューンにもふれてはいる。「完全な自治」と「上から

の一切の監督の排除」を意味する村落コミューンは、農民にとってきわめて有益である。（序にいえば「農民の九割がこれに賛成」であったというは根本的な誤りであった。）だがただちに、つぎのような理由があげられている。「われわれは中央集権主義者でなければならない。しかしわれわれの任務が地方に移される時も存在する。われわれは一つ一つの場所に最大限の創意をまかせなければならない。……われわれの党のみが革命を真に押し進める合図を与えるのである。」いかにしてこの「必要な」中央集権主義がこの完全な自治と合致するかについては、一見したところ依然明らかにされていない。ところがもっと仔細に見ると、われわれは、全くの指導的な視点が革命政治的もしくは革命戦略的なものであることに基づいて、両者が合致せしめられていることに気づくのである。この自治も行動綱領の一要素であって、構造の理念からの実際的要素ではない。他のすべてにもましてこのことから、「上からの一切の監督の排除」というプラグマチックな要求――おそらく革命後の発展のための要求ではなく、革命のさ中で成就され、革命を押し進めるはずの何かとしての要求――が、かくも早く全然逆のものに変ったかが理解できよう。真に社会主義的な態度なら、「われわれは中央集権主義者でなければならない。だが……時も存在する」という合言葉の代りに、それと逆の合言葉をかかげたであろう。「われわれは地方分権主義者、連合主義者、自治主義者でなければならない。だが、革命行動の要求から、主たる任務が中央に移される時も存在する。しかしわれわれは革命行動の

要求がその実質的および時間的な限界を越えないように注意しなければならない」と。

中央集権主義と上記の時点との間の対立をもっと精確に理解するためには、レーニン自身が強調したように、地方で「きわめてひんぱんに、とくにプロレタリア的中心地ではコミューンの建設が行われた」ことを、したがって「地域的コミューン革命が進行した」ことを想起しなければならない。上の合言葉はこうした事実に対応したのである。事態を叙述するのに適切な合言葉、「地方コミューン、すなわち警察なく官吏のいない完全な地方自治、武装した労働者農民大衆の独裁」等は、さかんにパリ・コミューンの経験を引き合いにしたが、革命政治的な合言葉であり、すなわちその本質上革命を越えて分権化的社会構造を目ざすものではなかったし、またそれにとどまっていた。――決定的な基礎は依然として中央集権主義である。レーニンが同じ綱領草案（一九一七年五月の）で、地方を模範として大都市の郊外および市区をコミューンに建設することを要求しているのを読むとき、われわれは深い印象を受けざるをえない。ところが再びそれらコミューンには、革命を押し進め、「国家権力のソヴェトへの移譲」のために、いっそう広い基盤を築くこと以外にいかなる存在理由も与えられていない。（「われわれはいま少数派であり、大衆はさしあたりわれわれを信頼していない」とレーニンはほぼ同じ頃にいっている。）レーニンは疑もなくあらゆる時代を通じて最も偉大な革命戦略家の一人である。主として彼の問題点に決着をつけるのは、マルクスにとって革命の政略がそうであった

ように、彼にとっては革命の戦略が行動だけでなくさらに思想の最高法則となっていたことである。これこそは彼の成功の基をなしたといえるであろう。彼の成功がついに社会主義の成功にならなかったのは、マルクスにおけると同じく彼においても心のより深い層に根ざしていた中央集権主義とともに、これに責任のあることはたしかである。

しかし上に述べたことから、私が一九一七年のレーニンに、発生しつつあるソヴェト権力を革命後には存続させまいとする意図があったとするものと解してはならない。それはばかげたことであろう。だが当時彼は重要な『政治情勢に関する報告』で、ソヴェトが権力を掌握するときに成立する国家――「もはやその言葉の普通の意味でのいかなる国家でもない」であろう国家――について、そのような国家権力はなるほどまだ一度も世界に長期間維持されたことはないが、世界の全労働者運動は結局それに帰することをはっきり言明した。レーニンについて私が力説したいのはむしろ、いかなる原則的中央集権主義も、直接の革命行動をこえてのかかる国家権力の存立とは両立しえないことにたいする洞察を欠いた点である。レーニンが同じ報告で、それが「社会主義の第一歩であり、社会主義社会の開始に不可避な」国家形態である、といっていることは注目に値する。この言葉は、この国家形態がたんにより高度の「社会主義的」中央集権主義への過渡として考えられていたことを示すように見える。レーニンが、社会の究極的改造のためにはまさに決定的に重要な経済の分野では、厳格な中央集権主義を目標と

したことは確実である。同じ大会でレーニンは、「フランス革命もコミューン革命の時期を経過したこと、それが地方自治におちついたこと」、そしてロシア革命も同様の段階を経過しつつあることを強調した。そのさいフランス革命のこの時期につづく極度の中央集権主義を無視することは困難であろう。

さらに別の側面から見ても、一九一七年のレーニン説はわれわれを同様の結論に導くのである。「土地の私有は廃止されなければならない」と彼はいっている。「これこそは大多数の人民が支持するところであるから、われわれの当面の課題である。そのためにわれわれはソヴェトが必要である。この方策は旧国家の官吏によっては遂行されえないであろう。」これがその政治報告での、「われわれは何のために権力を労働者および兵士の代表者ソヴェトの手に移そうとするのか」という質問にたいするレーニンの解答の要点である。ここでは「事情」にたいするマルクス主義的尊重が極端である。土地の私有を廃止しなければならないのは、社会主義を建設するためではなく、ただ大多数の人民がそれを欲するからである。そしてソヴェトが必要なのは、新しい社会の細胞をあたえるためではなく、大多数の人民が要求するところの方策を実施するためである。われわれはレーニンのこうした議論をあまり文字通りにとらない方がよかろうと思う。

だがいまやレーニンのソヴェト理論は決定的な段階にはいることになった。彼がフィンラン

ドからボルシェヴィキの特別な行動、すなわち「第二次革命」を準備していた数ケ月は、同時にソヴェトの機能に関する彼の思想を、最初は原理的にマルクスのパリ・コミューンの説明に結びつけて（彼の著名な『国家と革命』において）下ごしらえをし、ついで実践的にあらかじめ準備された行動に関連づけて（彼の最も重要な政治論文『ボルシェヴィキは国家権力を維持するか』において）大成した時期であった。『国家と革命』の主要部分は九月の反革命の企図とその弾圧の時期に書かれた。この企図の狙う効果は大衆を闘争にかりたて、それによって大衆を急進的党派に近づけることにあった。第二の論文は十月半に執筆されたが、それはペトログラードおよびモスクワのソヴェトが急進党の多数派のものとなり、その直接の結果として「すべての権力をソヴェトへ！」という呼びかけが、革命政略的要求からさし迫った戦闘開始の合言葉となった時である。

こうした出来事に鼓舞されたレーニンは、この論文で革命の発展にたいするソヴェトの意義をそれまで一度もなさなかったほどほめたたえた。ソヴェトは「革命の当初に民衆の真の創造的な力の強力な爆発から生れた」という、メンシェヴィキ指導者マルトフの言明に結びつけてレーニンはこういっている。「革命的階級（マルトフの言葉につけ加えたこの言葉はここではボルシェヴィキ的色彩をもちこんでいる）の創造的な民衆の力がソヴェトを生み出さなかったならば、ロシアのプロレタリア革命は望みのない事件となったであろう。」ソヴェトを「革命前

進の」機関とする見解がここにその歴史的意義を最も力強く強調している。

レーニンはこの論文で初めて、ソヴェトに基本的重要性を認める種々の動機をあげている。その列挙の順序は彼の見解の特色をよく示している。第一にこの「新しい国家装置」は、常備軍の代りに赤衛軍を設けることによって人民自身に武力を与える。第二に「新しい国家装置」は指導者と大衆との間に解きがたいほど緊密な、「コントロールし易い」結合を確立する。第三にそれは被選挙資格と解任の原則によって官僚制を排除する。第四に新しい国家装置がつくり出す様々の職業（後にレーニンはもっと正確に職業および生産単位といっている）との接触を通して最も重要な諸改革を行い易くする。第五に大衆を引きあげ、教育するところの前衛を組織する。そして第六に立法機能と行政機能とを結合することによって議会主義の長所と直接民主制の長所とを結び合せる。ここでまっ先にあげられるのは、革命の権力政略であり、第二番目には改革の組織が、第三番目には国家の形態がおかれている。社会構造の改変にたいするソヴェトの可能な重要性の問題などは、提起されてもいない。

ソヴェトは、レーニンによれば、ボルシェヴィキがそこで指導を獲得し、この新しい形式に具体的な活動内容をみたすことによって、初めてその任務を達成することができる。しかるにソヴェトはすでに社会革命党やメンシェヴィキのために「おしゃべり小屋に」、それどころか「生きたままで腐った身体」となっている。「ソヴェトは」とレーニンはつづける、「全国家権

力を掌握したのちに初めて現実にその素質と能力を十分に発揮することができる。全国家権力を掌握しなければ、ソヴェトはなすべきことが何もなくなり、たんなる生殖細胞（しかも人はあまり長い間生殖細胞であることはできない）であるか、あるいは玩具であるかでしかないからである。」この文章はいくつかの点で注目に値する。生殖細胞という比喩から必然的にわれわれに提起される問題は、レーニンの意見によれば、ソヴェトが成長と分裂を通して成熟し、更新された社会有機体の細胞となりうるかどうかということである。しかしそれは明らかにレーニンの意見ではない。それから数日後にこの「玩具」という言葉が、ペトログラード大会のためのレーニンのテーゼのなかで、独特の文脈において再び用いられている。すなわち「一九〇五年および一九一七年の二つの革命の全経験は、労働者および兵士代表ソヴェトはただ反乱の機関、ただ革命権力の機関として現実的な何かであったことを語っている。これらの任務以外ではソヴェトはたんなる玩具である。」レーニンにとって何が専ら根本の問題であるかが、ここにまぎれもなく明らかにされている。なるほど彼は当時現実を強調しなければならなかった。しかし彼がそれをなす仕方の排他性、またソヴェトの万一の独自的かつ永続的な任務にたいする考慮を全然許さない排他性が、誤解されようのない言葉で語られている。それに加えてなお、一九一五年にいった「反乱の機関」とか「ただ反乱と結んで」とかいう言葉がほとんど文字通りにくりかえされている。レーニンが初めて歴史的人物となったこの二ケ年の間に、ソヴェト

の現実について何を吟味し、何を反省にしたにせよ、ソヴェトは依然彼にとっては革命目的のための手段であった。たんにソヴェトが革命のために存在するのではなく、さらに――しかもより深い第一義的な意味で――革命がソヴェトのために存在することになるかも知れないというようなことは、彼の念頭には浮ばなかった。この点から――といっても私が考えているのは個人としてのレーニンではなく、彼のうちに典型的に示されている精神の性質と傾向とである――ソヴェトが現実においてもまた観念としても忘れられて行った理由が理解されよう。

「すべての権力をソヴェトへ」というレーニンのスローガンが革命政略的に、革命政略的にしか考えられていなかったことは、同じ論文で次の呼びかけを読むとき、われわれに一層的確になる。「それに二十四万のボルシェヴィキ党員では、富める人びとに反対して貧しい人びとの利益のためにロシアを統治することはできないのだから！」かくて「すべての権力をソヴェトへ」は、根本においては「ソヴェトを通してすべての権力を党へ」を意味するにすぎない。――そしてその革命政略的、それどころか党政略的な局面から別の社会主義的・構造的局面への発展を示すものは何も存在しない。その後間もなくレーニンは、ボルシェヴィキは「信念、党綱領および全戦術からして中央集権主義者」であることを確言している。したがって中央集権主義はたんに戦術的だけではなく、さらに原理的なものとして示されている。プロレタリア国家は中央集権主義的たるべきことをわれわれはきかされる。したがってソヴェトは、「強力な